武内もも 個展　パート タイム リビング
2024.07.20-08.04 Gallery2122
武内ももさんインタビュー

―制作のコンセプトや展覧会のテーマについて教えてください。

陶芸をベースとして活動しています。窯の中でいろんな物質が溶けてひとつになっていく、また様々な場所から集めてきた粘土が時間とともに多様な表情を見せていくといった、焼きものをつくる過程で起こる出来事と、そこに携わる制作者自身や作業場、それをとりまく街や人の出来事との繋がりに関心があり、それを制作の基本的なコンセプトとしています。

今回の展覧会は粘土に自分が見てきた人間の暮らしや風景を再現してもらう、預けるという試みです。風景や電球、服など人の暮らしの中にあるものに、粘土や焼きものがどう関われるのかということにも今回は取り組みました。

―作品について教えてください。

左：①《日記》2024 まな板、枝、陶土　右：②《きょうの終わりに》2024 陶土、釉薬、砂

生活している中で食事をつくって食べる時、いろんな場所から来た食べものが、このまな板の上で切られ、またひとつの新たな料理として作られていくことが面白いなと思って。そういう風に考えたときに、ここにある使い古されたまな板はシミや刻んだ跡が残っていて、これは何かの記録なんだな、ということに思い至り「日記」というタイトルをつけました。まな板は木を薄く切ったものですが、木として存在していた時にこの木の先にあった枝や土の記憶を意識して制作しました。

《きょうの終わりに》※②は、小さな器を模していて、モチーフはコンタクトレンズなんです。1 日の終わりにいろいろなものを取り込んで、眼から取り外されたもの。焼きものは焼成の過程で、粘土に含まれる隣り合った物質がくっついていくんですが、この作品にも小さな砂がついていて、焼かれた時の様子が刻まれている、というのもあって隣りに置いています。

③《熱を思い出すとき》2024 LED 電球、陶土

私たちの暮らしにとっての明かりは火から始まって、近年では蛍光灯や白熱電球は LED に変わりつつあり、熱を帯びた明かりはどんどん少なくなってきているように思います。この作品はよく見ると小さな虫を模した焼きものがくっついて電球が少し変形しています。窯の中で高温になった粘土は熱とともに光を発しています。人と工芸それぞれの、熱を帯びた光について、その接点について考えた作品です。

④《はじめてのファインダー》2024 陶土、酸化金属、釉薬

これはお皿のかたちを借りています。周りの立ち上がりをカメラのファインダーに見立て、この先に何かがあって、そこにつながるようにと制作しました。正面部分は、粘土を押して伸ばす過程で生まれた皺や溝を拾いながら線をかいて、そこにふたりの人を泥で載せて描きました。粘土の様子が人間の風景に思えてしまう、ということがしたくて。釉薬をうすく塗って仕上げています。

―床にもたくさん小さな粘土のかけらがありますね。

出かけた場所で川とか山を見に行って、もらえそうなら色々な所から土を拾ってきます。作業場では制作中にその土とか粘土がこぼれて、靴で踏んだりして…。靴のソールの跡が粘土についていたりする。すると、その土をとりに山に登った風景が見えるような気がします。この床の小さな粘土たちはそういったことの記録として表現しています。

⑤《通過中》2024 陶土、砂、酸化金属、釉薬

粘土を焼かずにそのまま置いておくと、表面が風化して特有の表情を見せるのですが、その様子をこれからも変化していく途中であるような、そんな瞬間として焼きものに残したいと思いました。

⑥《着いたら起こしてあげるから》2024 陶土、雲母、釉薬、シャモット

　車の中のルームミラーとそこに写る後部座席で眠る人。移動する過程を切り取った作品です。私は車の免許を持っていないので運転をしたことはありませんが、窯の管理と似たところがあるなと思って。制作者が運転していく（温度をあげていく）途中、窯の中で粘土がどんな景色をみているのかは想像することしかできないけれど、いずれ冷めれば対面することができる、そんな粘土と制作者自身の関係についての作品です。

⑦《山登りのタイムライン》2022 陶土、釉薬、シャモット

　山は街から見ると風景として存在を確認できるけれど、麓に立っていざ歩きはじめると、一本の木や枝、石などが集まって一つの山になっていることがわかって、登って高いところまで行く

と、今度は自分が住んでいる街が小さなものの集まりとして見えます。見る場所それぞれで視界や縮尺がぐっと変わることが面白いと感じます。その山を登って降りることで見える視界の変化が、粘土やそこに含まれる物質が窯の中で温度によって離れたりくっついたりする変化に似てい

るなと思って制作しました。

⑧《次の季節に》2024 シャツ、陶土、金具、糸

シャツって予備のボタンがついていますよね。それがいっぱいついてたら面白いかなと思って、焼きもののボタンをたくさんつけました。シャツのフォーマットを借りて、この先の人と陶芸の営みを表現できればと思って制作しました。

⑨《単位》2024 陶土、ポリバッグ

⑩《足跡はやがて》2024 陶土、釉薬

《単位》は生の粘土を入れたものです。粘土って陶芸家にとっては素材ですが、地球の一部で数えられないもの。それを人の単位でちょっとずつもらってきたものであることを表現しました。また、《足跡はやがて》はそれぞれの足跡です。これもひとつの記録です。

―展覧会タイトルに込めた想いを教えてください。

　制作することは人の生活の営みに似ていて、過去・現在・未来と続いています。人間はずっと焼きものを作りつづけてきた、ということがあるので、陶芸に携わっていると、そういった歴史や時間の流れについて考えざるを得ません。

　私は作品については、人間にとってどういう目的をもったかたちか、例えば鑑賞用なのかそうでないのかという視点では、見る人にとってどうあるべき、というところははっきりとはさせずに、あくまで作っている時の粘土や焼くことから考えられるものをまずは捉えたいと思っています。そういうことがこの展示で少しでも伝わると嬉しいなと思います。

―陶芸の他に活動されていることはありますか。

　美術の高校に通っていた時、そこで陶芸をはじめて学びました。その後もう少し学びたいという思いがあって美術大学に進学し陶芸を専攻しました。陶芸と同時に演劇もはじめて、今も陶芸と演劇をしながら生活をしています。演劇はパフォーマーではなく作り手として関わっています。文章を書くことも好きで、記憶したり、残したり、再現したり、そういうことの興味として、陶芸と演劇、どっちも混ざりながら活動しています。

―今後の活動の予定はありますか？

　これまでに粘土や焼きものについて考えられてきたことや試されてきたことを、もっと知りたいと思っています。それを自分でひとつひとつ試してやってみたいと思っています。そうした先に陶芸作品を制作することで、より密度の高い個展ができたらいいなと思っています。

（インタビュー：2024 年 7 月 26 日）

プロフィール
武内もも（たけうち　もも）
1997 年生まれ。2021 年京都精華大学芸術学部陶芸コース卒業。陶芸と人、その周辺で同時に起こりうる複数の時間や身体のあり方について関心を持ち、暮らしにまつわる人やもの、風景や現象を起点に、陶芸の素材に由来する特性や焼成による変化を重ね合わせた作品を制作・発表する。近年の主な発表に「第 11 回 500m 美術館賞入選展」（500m美術館、札幌、2024）、「MIND TRAIL 奥大和 心のなかの美術館」（奈良県吉野町、2023）、「HAPS KYOTO selection #1」（HAPS、京都、2023）、「Art-SITE vol.1 武内もも個展『待つ身体、眠る身体』」（金沢市民芸術村アート工房、石川、2022）がある。また、2016 年よりレトロニムに所属。都市や暮らしを通して演劇を見直すことに関心を寄せ、団体誌の発行のほか、パフォーマンス作品や展覧会を通し

た実践にも取り組んでいる。